林檎と鏡と神様の意思と

ぬこ巻き寿司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

林檎と鏡と神様の意思と

【Ｎコード】

Ｎ１９４２ＢＡ

【作者名】

ぬこ巻き寿司

【あらすじ】

短編小説集みたいな感じです。僕のブログから引っ張って加筆したものとかもあります。基本好き嫌いな無しにオールジャンルで書こうと思ってます。どうか生暖かい目で見守ってください。

道化師と崖に散る命（前書き）

とりあえず、この連載短編小説には登場人物に名前をつけない予定です。
なんとなく所信表明。

道化師と崖に散る命

道化師は言葉を話してはいけません。何故なら全てをその体を使って表現しなくてはいけないからです。

道化師は恋をしてはいけません。何故なら、一人の人間に恋をしてしまったら残りの七十億人を敵に回してしまうからです。

道化師は自由であってはいけません。何故なら、この二つの誓約を破ってはいけないからです。

ある日、道化師は荒波が蠢く崖に花を見つけました。
その荒波の上に立っているかのような強さと、太陽の下に咲いているような暖かさを持ったその花に道化師は心を奪われました。
道化師は早速彼女（と表現すべきなのでしょうか）を喜ばせようとその場でジャグリングを始めました。

道化師は人を喜ばせる達人です。少なくとも道化師はそう自覚していました。しかし、彼女（と読んだほうが便宜的によろしいので以後は彼女と記すことにします）は少しも、微塵も、ほんのちょっとも笑いませんでした。
次の日、道化師は玉乗りをしました。やはり彼女は笑いませんでした。

次の日は燃え盛る火の輪をくぐり抜けました。しかし彼女は暑そうに頭を垂れるだけで何も言いませんでした。

くる日もくる日も、雨の日も雪の日も、道化師は彼女を笑わせる事に全力を注ぎました。もちろん彼女は笑いません。道化師がどんな

におどけても、くすりともしないのです。

一方、彼女のおかげ、と言うべきか道化師はその道化具合がますます板につき、「道化師の前で笑わない人間はいない」。そう言われるまでになりました。
しかし、道化師の求めているのは彼女が笑ってくれること。
それを実現できない限り道化師の心が満たされることはありませんでした。

あくる日、道化師がいつものように荒波が轟く崖に出向きました。
そこにいた彼女はやせ細り、か細く、もう少しでその命と花弁が散ってしまいそうな程でした。
しかし、彼女の目は一心に道化師を見つめ、始めて口を開きました。
「私はもう散らなければならない。私の順番が来たの」
達観したように、怯えは全くないように彼女は道化師に言いました。
道化師は何も言いません。
「私は明日にはこの世には居ないのでしょう」
まるでそれが必然だというように。
まるでそれが絶対だというように。
彼女は道化師に呟きました。道化師は何も言いません。
「死ぬのは、散るのは、怖くない」
しかし、今までと違って、彼女の声はまるでそれは怖い話を聞いた子供のように、震え、怯えていました。道化師は何も言いません。

「だから、どうか、どうか―一緒に泣いてくれる？」

道化師は何も言いませんでした。
その代わりに、道化師は彼女を優しく包むように抱きしめました。

そして、彼は最期に自分自身の気持ちで、初めて言葉を発しました。
「僕は、出来れば君と笑いたかった。君と黙っていたかった。僕は笑わせるための道化師。それなら、一生のうち最期くらい泣いてもいいのかな」
「—初めて、しゃべってくれましたね」
「君もだろう？」
「いいえ、私は最初から貴方に話しかけていました。ようやく最期に私の思いは貴方に通じたのです」
道化師は、笑いました。彼女も、笑いました。
「じゃあ、そんな僕らを運命なんかに惑わされていちゃいけないね。また今度、何処かで会おう」
道化師は、生まれた初めて泣きました。彼女もまた。
「僕も一緒に逝こう」「私たちは私たちの終わり方で」「じゃあ、体を捨てて」「結ばれましょう」「僕と」「私に」「愛を」

—どこかの世界で、道化師と水仙は今でも。

道化師と崖に散る命（後書き）

記念すべき第一弾。恋愛モノをお送りいたしましたｍ９っ、・ω・´）

感想とか評価あったら面倒くさいとは思いますがよろしくお願いします（必死）

とりあえず頑張りました！

浴槽と幽霊と乗り突っ込みと（前書き）

だるまさんが転んだ。浴槽で言ってはいけない言葉。それを唱えた主人公の鏡の後ろに幽霊が現れて…楽しく談笑する物語。コメディからのシリアス。複線とか張ってみたり。

浴槽と幽霊と乗り突っ込みと

だるまさんが転んだ。

お風呂場で頭を洗っているときに言うと自分の背後に女の霊が映るらしい。

全くくだらない話だ。俺は風呂場で頭を洗いながら思う。

前に友人が「一瞬霊見えたって！！俺腰抜けたもん！」とか言っていたから思い出しただけの事。

それ以上気にする必要は無かった。

しかしそう言われると言ってみたくなるのが人間の性。

気付けば俺は「だるまさんがころんだ」と無意識のうちに呟いていた。

少しして鏡を見る。俺の体以外何も映っていなかった。

「ふう。やっぱり。いや、そりゃそうか。そんなこと言って出てきたら怖さなんて微塵も無いか」

俺は少し安心して頭の泡をシャワーで流す。

シャワーをしているときは目を閉じらければならないのは少し怖かったが一々そんなことに気を取られている必要は無いだろうと我慢して目を固く結ぶ。

「ふう。さっぱりー」目を開ける。

「あ、さっぱりしたですか」

「うんうん、ぶっちゃけ幽霊怖かったけど何てこと無かった」

「あ、やっぱり貴方の言ったとおり微塵も怖く無かったですか」

「・・・・・・あれ？」目を開けて俺の目の前にある鏡を見ると、幽霊がいた。

「えええええええええええええええええ！？」
「きゃあああああああああああああああ！？」
悲鳴。なぜか幽霊まで怖がっている。髪は腰まであろうかという貞子スタイル、やはり幽霊というのは童女が多いらしい。この子もそうだった。
その子（？）は可愛らしく、いや実際顔なんて髪の毛のせいで見えないのだが、叫んだ。

「いきなりなんですか！？びっくりしたでしょう！？」
「ええ、ああ・・・すみません」謎の剣幕に怯み謝る俺。
「というかずるいですよ！ビックリしないとか言っておいて！嘘吐く男は女に捨てられますよ！」
「うん、確かに俺捨てられたり・・・そうじゃなくて！普通本当に出てくるとは思わねーだろ！っていうかあの時点でいたのかよ！」
「乗り突っ込みだ！始めて見た！というか貴方がお風呂に入った時からいたのですよ！」
「だるまさん転んだ関係無かったんだ！」
「以前この近くの家のお風呂にお邪魔したときは腰を抜かれて驚かれもしたのですよ！」
「お前の所為か！お前の所為だったのか！」

と俺は勢い良く後ろを振返る。
「！？」
何もいなかった。風呂桶と石鹸だけしか転がっていない。
幽霊は何処からとも無く言う。
「ああ、駄目です。見えません。というか人間は直接幽霊の姿を見てしまうと死んでしまうんです。幽霊、ダメ、ゼッタイ」
「何故に薬物乱用防止の標語みたいな台詞を・・・」
「まあ私の死因は薬物中毒者による暴走運転ですから」

「・・・そうだったんだ。そういえばうちのお姉ちゃんもそういう関係の死因だった。まああの人は目がみえなかったって言うのもあったんだけど」

双方で過去の闇を晒した所為でにわかに場の空気が重くなる。と、それを察したのか幽霊はあからさまな自虐ネタで空気を変えようとする。

「いや、まあ私みたいな幽霊が出たら正常な人でもおかしくなっちゃいますけどね！」

「いや、そんなこと無いよ。俺が君の声を世の中に届けてあげるから」

自虐する幽霊をなだめる様に言う。

この子をなんとなく守りたくなってしまう。

顔を見えない（髪の毛によって）、名前も知らないそんな子なのに。

少しの沈黙。その空気を破るのは幽霊の馬鹿みたいなはしゃぎ声だった。

「アンケート終了！お題、『無念の死に直面した幽霊をどう励ますか！』をクリア致しました！」

「・・・うん？」

「いや、だからアンケートー」

「うん。じゃあ今までのは？」

「演技です☆私の死因はチョコレート食べすぎです☆」

「☆じゃねーよ！！しかも死に方にしては苦痛が無さそうだな！」

「はい、ミルクチョコなのに甘くて甘くて苦かったんです」

「最後のは血だ！！」

「さておき、私はなかなか上手かった。さり気なーく本筋に持っていく力。でもあそこでの貴方の突っ込みは流石でした。まるでこちらの意図を全て読んでいるかのよう・・・。血の繋がってないと出

来ないような芸当。しかもその後での名言。冥土の土産にします」
「・・・そういえば俺、結構恥ずかしい事いってませんでした？」
「言ってはいませんが結構思ってましたね。守りたい、だとか」
「心読めるんですか！？」
「いいえ、適当です」しれっと言う幽霊。

鏡越しの彼女に表情が見えない。しかし屈託の無い笑顔で笑っているような気がした。
「っていうか、俺幽霊と話してるんだよな？」
「そういうことになりますねー」
「俺すごくね？」
「いいえ」きっぱりと言う幽霊。「毎年三千人くらいは幽霊と仮遭遇します」
「仮遭遇？」聞きなれない単語だ。
幽霊はそんなのも分かんないんですか？という口調で俺に説明する。
「まあ前にも言ったように『遭遇』というのは死を意味しているので、今のような鏡などの媒体を使って遭遇することを『仮遭遇』と呼んでいるのです」
「ふーん・・・」
「ちなみに、今まで私が『仮遭遇』に使った媒体でもっともシュールだったのはコンドームです」
「シュールだ！物凄いシュールだ！」
「使用中に話しかけてみたら驚いて失神されていました。それから私がどうやってその媒体から抜け出したのか・・・。壮絶でした」
「言わなくて良い！そもそも女の子がそんな所に潜り込むんじゃありません！」
「まあ今の会話の流れで女性読者は確実に減ったことでしょう」
「何の話をしてるの！？」
「貴方には関係ないことですのでお気になさらず」
「じゃあ、気にしないけどさ」

「ほう、そういえば貴方もそういうことを考える年頃になったんですね」
「うるせー！思春期男子をもてあそぶな！」

少し経ち、ようやく平静を取り戻した俺は浴槽に入り今もなお鏡に映る幽霊に話しかける。
「そういえば今まで君のネタな話か聞いてなかったけどプロフィールとかってあるの？」
幽霊のプロフィール。少し興味があるような気がした。
しかし幽霊は素っ気無く答えた。
「いいえ。わかりません。今現時点で分かっているのは死因だけです」
「死因しか分かってないの？」
「ああ、少し齟齬がありましたね。先ほどのアンケートがあるでしょう？アレを何千枚集めたら死因を教える、とか性別を教える、というシステムなんです。ちなみにチョコレート云々はネタです」
「当たり前だ。アレルギーならまだしも。じゃあさ、全てを知ったら何かできるの？成仏とか？」
いいえ、まさか、と言う様に幽霊は首を振った。
「転生ですよ。生まれ変わり。わざわざ消えるために頑張る奴がいますか」
「そんなもんなのかあ」
「そんなもんですよ。でも、」幽霊はここで言葉を切り、そして一度息を吸って残りの言葉を吐いた。
「でも、大部分の幽霊は仕事をこなさず成仏してしまいます」
もし俺が死んだら。この子のように踏ん切りをつけて働けるだろうか。そう思うと少し気分が落ちた。
「・・・そうだったんだ。じゃあ君は特別気丈に働いているんだね」

「そう、ですね。色々やりたいことがありますから」
「やりたいこと、かあ」
「やりたいこと、です。あなたもまだ色々やりたいでしょう？」
「うん。まだ、俺は誰にも感謝を伝えてない」

再び沈黙が落ちる。しかし一回目と違ってお互いがお互いを思いやっている故の沈黙だった。

「わたし、馬鹿なんです」
口を開いたのはまたしても幽霊だった。しかしそれは俺がアンケートに答えた後のテンションではなく何か重いものを持っているような。
「だから死んだんです。すぐ周りが見えなくなっちゃって」

幽霊は言う。
「本当はね、今日、貴方を殺しに来たのです。前回で仕事は全て終わりましたから」

小さい幽霊は言う。
「隙をうかがって殺すつもりだった。一瞬で。一息に」

長い髪の小さい幽霊は言う。
「でも出来なかった。私がこれから殺める人間がすばらしい人間だったと気付いてしまったから」

長い髪の似合う小さい幽霊は言う。
「アンケートは癖になっていた。もう何万回と繰り返したことだから。でもそれが私の意志をも揺らがせるとは思っていなかった」

長い髪の似合う小さい幽霊は悲しそうに言う。

「私に貴方は殺せない。だって、もう好きになってしまった。好きな人を殺めたくない。たとえ私が人間になる最後のチャンスだとしても」

長い髪の似合う小さい幽霊は悲しそうにこちらを見て言う。

「貴方にはやりたいことがあるんでしょう？誰かへの感謝なんてどれだけ時間がかかってもいいから達成しなさい。なんて、会って間もないと思うけどそのぐらい出来る人だと思うから大丈夫だね」

長い髪の似合う小さい幽霊は悲しそうに涙を流しながらこちらを見て言う。

「これでお別れ。またどこかで会いたいな。」

幽霊は言った。

「ばいばい。大好きだよ」

一人ぼっちの浴槽。一人きりの入浴。

どれくらい時間が経っただろうか、俺の目は汗とも水とも涙とも血とも分からない何かで一杯になっていた。

あの幽霊は消えてしまっていた。

俺はそれをただ見ているだけしか出来なかった。

あまりにも別れが唐突過ぎたから。

ただ、なんとなく確信しているところがあった。

俺はそれを確かめるべく瞳の液体を拭い、真っ赤になった目で浴槽を出た。

向かう場所は、仏壇。

仏壇の前に立ち、姉の写真を見ながら呟く。
「姉ちゃん、今日は久しぶりに会えたね」
仏壇の姉が笑った気がした。

浴槽と幽霊と乗り突っ込みと（後書き）

まあなんでお姉ちゃんだったかというと。
どうでも良い方はスルーで構いません。

まず根拠一。
　主人公の台詞。

◇「そういえばうちのお姉ちゃんもそういう関係の死因だった。まああの人は目がみえなかったって言うのもあったんだけど」

　に対して幽霊の台詞。

◇「わたし、馬鹿なんです。だから死んだんです。すぐ周りが見えなくなっちゃって」

↓幽霊が言う「周り」とは「周りの世界」のこと。つまり「視界」。
幽霊は主人公の姉と同じく盲目であった。

根拠二。
主人公の心情。

◇この子をなんとなく守りたくなってしまう。
顔を見えない（髪の毛によって）、名前も知らないそんな子なのに。

↓多少強引ですがこれは身内だったから…と。

根拠三。
幽霊の言葉。

◇「さておき、私はなかなか上手かった。さり気なーく本筋に持っていく力。でもあそこでの貴方の突っ込みは流石でした。まるでこちらの意図を全て読んでいるかのよう・・・。血の繋がってないと出来ないような芸当。しかもその後での名言。冥土の土産にします」

↓あからさまに身内を匂わせる発言。幽霊は自分が彼の姉ということが分かっていたのかも。

根拠四。
その他幽霊の少し不自然な台詞。

◇「ほう、そういえば貴方もそういうことを考える年頃になったんですね」

↓これは「お年頃〜なんですね」でいいはずなのに。

◇「貴方にはやりたいことがあるんでしょう？誰かへの感謝なんてどれだけ時間がかかってもいいから達成しなさい。なんて、会って間もないと思うけどそのぐらい出来る人だと思うから大丈夫だね」

↓「会って間もないと思う…？」「会って間もない」で良いのに。

まあ、そんなところです！！
感想とか評価とかつけてくれたら嬉しいぜ（；。д。）！！
あと伏線の上手な張り方を教えてくださいｍ（＿＿＿＿）ｍ

人間辞典（？）

僕は人の名前を覚えるのが苦手だ。
皆が皆同じ記号に見えてしまう。
名前を覚えるのには一ヶ月はかかる事請け合いだ。
名前より顔を先に覚えてしまう。

しかし僕はそれをあまり短所としていなかった。
小学生からほとんど全員が同じ中学校にあがったから中学校ではその欠点を欠点と思うことが無かった。
まあ、先生を呼ぶときは「先生」で事足りるわけだし。

―しかし、ああ、高校！
一クラス四十人という箱庭、それも同じ中学校の時からの知り合いはゼロだ。
こんなところで生きていくだなんて！！

―と、思っていたわけですよ。
高校を入学して早々、この『人間辞典』と出会うまでは―。

◇　◇　◇

その日、僕はクラスで行う最初の授業ということで自己紹介をして

いた。
僕にとってもはや鬼門である。
出席番号順に、何か意味不明の感じの羅列がクラスメイトの口から発せられる。まあ、多分名前なのだろうけど。名前そのものに拒否反応を起こしているのかもしれない。
暗記は得意なのだけど。新入生テストの社会は九十二点だぜ。間違ったのは人名なんだぜ。
僕の番になるまで延々と繰り返される異星語。（人の名前）僕は覚えることを放置していた。
僕の番だ。僕は少し軽い感じで自己紹介を終える。根暗で名前も覚えられないじゃこの先大変だからな。
皆の自己紹介が終わり、先生が口を開く。
「じゃあ、今度は隣の人の名前を紹介してみてください」
「……」人知れず絶句する僕。
皆がそつなくこなす中、僕だけ顔を引きつらせていた。
そんな僕の様子を察したのか、お隣の人がささやくような声で僕に話しかける。
「吾妻幸助（あがつまこうすけ）だよ。これからよろしく」
自称・吾妻君は僕に笑いかける。良いやつだ。
とうとう紹介は僕の番。いくらなんでも十秒前に聞いた名前を忘れるわけが―。
「この人は、とても良い人で、……ごめん、もう一回名前聞かせてもらっていいかな？」

クラスの授業の初め、最低なスタートを切った僕は一人トイレに続く廊下を歩いていた。
「ふう…。大体、覚えられないんだから何が悪い」
と僕がひねくれて開き直っていたとき、

『それ』は突然僕の前に落ちてきた。

「…ん？」
『それ』は本のような形をしていて、それでいて馬鹿みたいにページ数が多く厚い。
『それ』の表紙には「人間辞典」と書かれていた。

僕はそれを拾い上げてページをめくる。
【あ行　阿井伊織　阿井伊美　阿井泉亜子】
「なんだこれ…？」僕はそのままページを最後までめくる。
【わ行　湾沢陸生　分目亘理　分目渉】

結局なんなんだろう。ざっと３０００ページ以上はあるだろう。
ひょっとして、皆の名前が載ってたりして。
僕はあの自己紹介の人を調べてみる事にした。僕はクラスに戻り、彼がいる机に行き、名前を確認する。
「え、と。【吾妻幸助】っと・・・。」
好奇心半分、面白半分で吾妻君の名前を辞書でひいてみた。
「あった・・・・・・。」

【吾妻幸助　男性　１９９５～２０３０　あだ名はこーちゃん。運動神経が良く、頭も良いために自宅付近にある進学高校に進学、そこでサッカーの才能を認められ２０１５年にプロデビュー。２０３

０年に不慮の事故にあい死亡。】

未来が書かれている？２０３０年？今は２０１２年のはずだ。
確かに僕の通っている高校は進学校だが。それだからといって信じれるわけはない。
気になった僕は彼に尋ねてみることにした。冗談だと知っていても、尋ねられずにはいられなかった。

「ねえねえ、吾妻くん・・だっけ。これからよろしくね。中学では何部は入ってたの？」
「あ、自己紹介のときの。よろしくね。水泳部だよ。」
ほうら。やっぱりこんなの嘘か。なにが『人間辞書』だ。
しかし、僕は次の言葉で凍りつく事となる。
「でもねー水泳はやめてサッカー部入ろうとしてるんだよねー。先輩がさ、『こーちゃんはサッカーの才能あるよ、っていうから。』

あだ名はこーちゃん。
サッカーの才能。
僕が知っている吾妻幸助とあまりにも合っている。合いすぎている。
まるで辞書でも引いたかのような正確さで。
３０００ページ以上の『それ』は僕の机で佇んでいた。

人間辞典（？）（後書き）

意味不明な連載を始めました（、・ω・，）！！

がんばって続きを書きますｍ９っ、・ω・，）

応援とかしてくれたら嬉しかったり↑

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1942ba/

林檎と鏡と神様の意思と

2012年1月8日21時54分発行